第十三回ふくふく童話大賞「大賞」

おならのかみさま

算数の時間。とつぜん、ぷおーんというトロンボーンのような音が、教室にとどろいた。

「あれれれれ」

いちばん前の席のマナブが、体をくねくねさせて立ちあがり、真っ赤な顔でさけんだ。

「いまの、ぼくじゃないよ」

すかさず、となりの席のショウゴがはやしたてる。

「マナブがへをこいたぞ」

たちまち、てんやわんやの大さわぎになった。まどぎわの席のタクヤが、鼻をつまんで、においをはらいのけるまねをしている。

「はい、みなさん、おしずかに」

ジュウキチ先生が、手をぱんぱんたたいた。

ジュウキチ先生は、新米だが、とても年をとっているように見える。ごましおのようなひげをはやし、めがねは、ずれっぱなし。ねこぜで、いつもぶかぶかの服をきていた。

「おしずかに、ショウゴくん。マナブくんも顔をあげて」

ジュウキチ先生は、やさしく声をかける。

ショウゴはうでにくちびるをあて、ぶうと鳴らし、しせいをただし

た。マナブはうつむいたまま、ショウゴをじろりとにらむ。

「みなさんは、おならのかみさまを知っていますか」

ジュウキチ先生が、細い首をかしげながら、のんびりした声でいった。

「おならのかみさまあ？」

タクヤが、わざとらしくのけぞる。

ジュウキチ先生は、えへん、とえらそうなせきばらいをした。

算数の授業はもうおしまい。ときどき、なにかのきっかけで授業がちゅうだんすると、ジュウキチ先生は、こどもたちがよろこぶような、おもしろい話をきかせてくれるのだった。

マナブは、だまって下をむいていた。
「おならのかみさまは、おなかの健康とユーモアをつかさどるかみさまでね」
ジュウキチ先生は目をとじ、ぼそぼそとしゃべりはじめた。
「にんげんのおなかにたまった、ガスをぬく仕事をしている。ふつうはだれでも、おならをだそうか、だすまいか、自分でコントロールできますね。でも、思いがけずでてしまうことがあるでしょう」
ジュウキチ先生は、目をとじたまま、めがねを人さし指ぐいっとおしあげた。
「おなかにガスがたくさんたまっているのに気づかない。おならのか

みさまは、そんな人のところへやってきて、せっせとガスをぬいてくれる。おなかの健康をまもってくれているんだ」

開け放たれたまどから、風がさっとふきこみ、黄色いカーテンがふわりとふくらむ。

「それから、とってもいたずら好きでねぇ。てのひらにのるくらい小さくて、てっぽう玉よりすばしっこい。体は、ピンポン玉みたいにまんまるで、首や手足を、だしたりひっこめたりできるんだ。ちょうどカメのようにね」

それまで、うつむいてじっと話をきいていたマナブが、ぱっと顔をあげた。

「黄色いマントをかぶってる」
マナブは、胸をどきどきさせながらいった。
「その、小さくて、カメみたいな、おならのかみさまっての、黄色いマントをかぶってるよ。さっき、ぼくのひざの上にいたんだ」
ジュウキチ先生は、びっくりした顔をして、口をぽかんとあけた。
「うっそだあ」
ショウゴが体をのけぞらす。
「そんなの見なかったぞ」
タクヤが口をとがらせる。
そのときだった。もうれつな風が、まどからびゅうんとふきこんで

きた。つくえの上のノートやえんぴつが、ばさばさ、がちゃがちゃっと、ゆかにころげ落ちた。ぷおーんというトロンボーンのような音が、教室のてんじょうにこだまし、まどガラスが、がたがたふるえた。

「まどをしめろ」

ショウゴがわめいた。

タクヤが、はいつくばってまどをしめる。

黄色いカーテンが、生き物のようにびらびらはためき、すうっとおとなしくなった。

「そこになにかいるぞ」

マナブがさけんだとたん、小さなかげが、カーテンの裏からしゅっ

と、とびだしてきた。あっというまもなかった。その小さなかげは、ジュウキチ先生のぽっかりあいた口の中に、ひょいっと、とびこんでしまったのだ。

ジュウキチ先生は、しゃっくりをして、しゃきっとせなかをのばし、ぶかぶかの上着をぱっ、と宙に放り投げた。それから、指揮者になったように両うでをふりあげると、右手でショウゴをさっと指名した。

「ぷう」

ショウゴは、あっと、しりをおさえて立ちあがった。

ジュウキチ先生は、続けてさっ、さっ、とテンポよく、こどもたち

を指名(しめい)していく。指名(しめい)されたものは、おならをして、あっとか、きゃっとか声(こえ)をあげて、立(た)ちあがった。

マナブがぷう、あっ。タクヤがぷう、あっ。レイナがぷう、きゃっ。アイがぷう、きゃ。

先生(せんせい)は、気持(きも)ちよさそうに体(からだ)をゆらしながら、おならにあわせてうたいはじめた。

おならのかみさま　ぷう
目(め)にはうつらねど　ぷう
風(かぜ)に身(み)をよせて　ぷう

あらわれたる　ぷう　ぷう

おなかのちょうしが　ぶっ
あんまりよくない　ぶっ
ならばこうしよう　ぶっ
ガスばくはつ　ぶう　ぶう

じんたいのしんぴ　ぷう
ちきゅうのユーモア　ぷう
感(かん)じてみようよ　ぷう

おなら鳴らし　ぷう　ぷう

さいごに、ジュウキチ先生は大きく息をすいこむと、ひきちぎれんばかりに両うでを広げ、天をあおいだ。

おならの大合唱が、高らかにひびきわたった。

「ぷぷぷぷう、ぷおーん、ぶぶぶぶう、ぶおーん、わおーん、ぱおーん」

マナブも、ショウゴも、タクヤも、レイナも、アイも、クラスメイトぜんいんが、よっぱらったように、うっとりした顔になっていた。

しばらくして、ショウゴが声をあげた。

「まどをあけろ」

タクヤが、あたふたとまどをあける。同時に、ジュウキチ先生の口の中から、ちいさなかげがしゅっと、とびだし、まどの外へでていった。

「おならのかみさま！」

マナブがさけんだ。黄色いカーテンが、ひらりとまいあがった。それは、おならのかみさまが、黄色いマントをひるがえし、「さらばじゃ」といっているようだった。

「えーと、どこまではなしたかな」

ジュウキチ先生が、のんびりした声でいった。

「そうそう、おならのかみさまは、とってもいたずら好きでねえ。てのひらにのるくらい小さくて、てっぽう玉よりすばしっこい」
「先生、見たことあるの？」
ショウゴがたずねた。
マナブは、いま見たじゃないかといおうとして、あれ？　と首をかしげた。
ノートやえんぴつが、ひとつもゆかに落ちてない。クラスメイトぜんいんが、なにごともなかったような顔で、きちんといすにすわっているではないか。
「見たことありますよ」

ジュウキチ先生は、すました顔でうなずいた。ねこぜで、ぶかぶかの服をきた、いつものジュウキチ先生だ。

「子どものころでしたけどね。それがふしぎなんですよ。授業中にみんなで、おならの大合奏をしたのに、だれひとり覚えてるものがいなくてねえ」

マナブは、ごくりとつばをのみこんだ。

「おならの大合奏？」

タクヤがのけぞる。

「くっさそー」

ショウゴが、すっとんきょうな声をあげた。

マナブは、クラスメイトの顔をきょろきょろ見まわした。

「おや？　気のせいかな。みなさん、ガスをぬいたばかりのような、すっきりした顔をしていますねえ」

ジュウキチ先生が、めがねを人さし指でぐいっとおしあげた。

終業のチャイムが鳴った。

（塚田　学）

キャロットジュース

「よっしゃ、今日は一番乗りだ。」と、僕は誰もいないはずの教室に滑り込んだ。

「あれー、誰かいるの？」また薄暗く静まり返った教室の真ん中に、見慣れないひとりの男の子が椅子にかけていた。

そして、僕に微笑みかけた。

僕はあせりながら「きょ、教室まちがえました」と一目散に廊下に飛び出した。

その男の子は、何か言ったけど、あわてていた僕は、よく聞き取れなかった。

廊下に出ると、向こうの側から同じクラスのケントが一生懸命走ってくるのが見えた。

ケントは、元気な声で「おはよう、ああー今日は仁太が一番か」と、残念そうに言いながら、今、僕が飛び出したばかりの教室に向かった。

「あれ？　やっぱり間違えてないよな」

「どうしたんだ？」

「いや、俺たちの教室に見たことのない奴が座っているから、教室

を間違えたと思ったんだ」

二人は、お互いに向かい合い、目で合図すると一気に教室に飛び込み、そしてグルッと中を見回した。

その速さは、自分たちでも驚くぐらい　でカッコイイ感じだった。でも、教室には誰もいなった。

ケントは、　とため息をつくと、「仁太おまえさ、　ごはんたべたか？」

僕は、はっとしてつい　えた。

「ごはんは、　べたけど、　日　んでるキャロットジュースが今日はなかったんだ」

「へえー」

今日は、にお さんにキャロットジュースを ってもらおうと めた。

しずつ、クラスの みんなが してきて、教室がにぎやかになった、の の が鳴り、 の上 先生が教室に って た。

先生は、「おーい、席につけー。今日はみんなに新しいクラスメイトを するぞー。おい、 っていいぞ」

生が教室に ると、僕は、あ ーと大声で んで立ち上がった。

「、見た子だ」

「えっ？　なに？　それって？」と　の席の　が声をかけてきた。
ケントは、「仁太、お前が見た男の子って、こいつか？　よかったな
キャロットジュースのせいじゃないんだ」
「なんだよー、仁太が見た男の子ってさ　？」
「キャロットジュースって、どんな話？」
　なんだか、僕の一言でクラス中が　イ　イガヤガヤ大　ぎになっ
てしまった。
「はい、みんなも静かに。仁太も座ろうか。さてと、それでは自
　してもらおうか。」
　男の子は、し　ずかしそうに「な　ま　えはゴウ　アレックス

です。　ッカーの　のブラジルから　ました、よろしく。」
先生は、「仁太とはもう　のようだな、　で　ッカー　の
とかで　にのってやれなー」
先生は、ゴウの席を僕のすぐ前にした。
に　だと思っているようだ。
「へーえ、ブラジルから　たんだ。日　上手だね。顔もさあ、仁太
と　いよね」
と、　、　が話しかけてきた。
僕と　いということは、何？　僕もゴウ　アレックス　のよ
うに　い　なのか？　そんなことより、僕はゴウ　アレックス

が、いつの間にかえてしまってことが、気になってしかたがなかった。

先生の話では、ゴウ アレックス はブラジル生まれの日で、お さんの でお さんと の 人でおじいさんの のでもある に たらしい。

お さんは、日 アメ カ人ということだ。

「なんだか だね」と は、ひたすら感 している。

ブラジルでは、おじいさんが日 教室を開いていたから日は上手だ。

先生は「じゃあこれから、ゴウと んでいいか」と、きくと「はい」

と、元気な声で　えたので、ゴウ　アレックス　をみんなもゴウと　ぶことにした。

「なんだか、ゴウってケイン　コス　に　し　てない？」と、　が言った。

僕も落ち着いて見ると、そう見えた。

と、いうことは僕も　ているのだろうか？　ケイン　コス　に！

ヤ　ー！　と、　、声を出しそうになったのを、なんとかこらえた。

が、「仁太、なにひとりで　ヤ　ヤしてんの？　大　？」と、顔をのぞいてきた。

放っといてほしい、とすごく思った。

僕は、すぐにでも　のことを　ねたかったけど、　み時間はクラスのみんなに　まれていて　　めにあっている。
お　のちびっ子タイムなんかには、ほかのクラスの奴まで　るし。
、聞きそびれてしまった。
その　日、僕は　日おかあさんに　んで　ってもらった、キャロットジュースをしっかりと　んでから学　に向かった。
今日こそ一番かもしれないぞ。と、思い　　に　り　を　きえようとした。
げた　の中には、うわばきに　き　えられた一　の　がきちんと

べてあった。

新しく かれた持ち の名 には、ゴウ アレックス と いてあった。

よっしゃー！ ゴウに 日のことを聞こう。

僕は、 ぎ足で教室に向かった。

教室に ると、 が開いていて、ゴウが を めている。

僕は、息を く い込んでから「おはよう今日も いな」と、元気よく声をかけた。

ゴウは、 し驚きながら僕のほうを り返り、「おはよう。 と話したくて く たんだ。ジンタン。」とテレくさそうに言った。

僕は、こいつマジ？　は日　タじゃなのと思った？
きっと　違いしているな、と思い　し「あのージンタンじゃなくてジンタだよ。わかった？　ジンタンはつぶつぶの　のようなもの」
ゴウは「えっ、　日ケントがそう教えてくれたんだけど　ごめんな」
「いいよ、いいよ、大したことないよ」
でも　の中では、ケントの奴、　でこちょこちょの　にしたるぞ。
と　した。
僕は、思い　ってゴウに　した。
「　日のことだけど、教室に　ったら見たこともないゴウがいただろう。あわてて教室を出てケントと　ると、もういなかった。一体あ

のはや　は、どうやって出　たんだい？」

ゴウは、クスッと笑いながら　を指さして「あそこのボックスにれたんだ。　が驚いて出て　こうとするから　てて、ついブラジルの言　で　に声をかけてしまったから。　をもっと驚かせてしまったと思ったんだ、　かったよ。あんなに大　ぎになってるなんて思わなかったから」

そうだったのか。僕も驚いたけど、ゴウの　も同じだったんだ。

僕は、へへっと笑って鼻をつまみながら「ところでさ　イ、きつかっただろう？」

「うん、ちょいとク　カッタ」と　な日　で　えてくれた。

二人とも、大笑いした。

それから、僕とケントがキャロットジュースの話をしながらをしている間に　ろの　アから足音も立てずに、　室に　ったと話してくれた。

その話しを　いて、僕とケントの　な　きも、ゴウにはかなわないと　った。

それから、　ッカー　への　の　や　日などを　した。

ゴウは、　からグラン　を見て、「　に小さいね。だからみんなんで　く　日で　うんだね。それもいいね。でも、　ッカーが　日出　ないなんて、僕にはすごくさびしいことなんだ。ジンタ」

そんなこと　えたこともなたった僕には、一　キッとする言だった。

小学　年生からやっているけど、そんなこと思ってもみなかった。言われるけど、　日でもボール　りたいな、と感じた。

ゴウは、　き　めたころから、　ッカーボールを　日　っているというから、さびしいだろうし、さすがブラジルだなと感　もした。

ゴウの話を聞き、　思　な気持ちになった。

そういえば　日の　、　でブラジルを　すと日　の　側にあったことを思い出した。

ゴウは、そこでブラジルの　と　日ボールを　っていたんだろう

な、と　そうぞう　していた。

すると、廊下を　タ　タと走る音と、　仁太に、ゴウー、　いな

ー　と、ケントの声だけが先に教室に聞こえてきた。

僕と、ゴウは顔を見合わせて目で合図すると　に　へ　け込

んだ。

「あれ？」とひょうしぬけした　子のケントの声だけが、誰もいない

教室に　いていた。

（玉元　一）

サンラー

（一）

おいらは、ンラーに出った。の ンラーは、みんなが思っているようにいやつなんかじゃない。

大人たちは、子どもが何さをすると、「ンラーのようになるぞ」と、子どもをす。だから、みんなはンラーをいやつだと思ってしまっている。

ンラーは、この の真ん中にそびえ立っている、大にんで

いるという話だ。　、何か大きな事　を　きこしたらしい。それで、　を　れて、一人、　に　っていったのだと、大人たちから聞かされている。　ンラーがどんな事　を　きこしたのかは、よく知らない。　はいろいろあるが大人たちも　のことは話したがらない。

その　ンラーに、おいらは出　った。　の　ンラーは、みんながが思っている　ンラーの　とはかなり違う。きっと、みんなは　の　ンラーをわかってないんだ。まあ、それはしょうがないことなのかもしれない。だって、みんな　ンラーの　を見たこともないんだから。

おいらが、　ンラーと出　ったのは、そう、あの事　がきっかけだ

ったんだ。あの事のことを思い出すと、おいらは今でも胸の中が、キッとむんだ。

（二）

「おい、つぎはぎポン。おまえのちゃんやちゃんはどこにいる？」

いつものように太とその取りき中が、からんできやがった。

「知らん。それにおいらはポンっていう名前じゃねえぞ」

おいらは、ポンってばれると に が立つ。

「へえ、ったのか？ つぎはぎポン。ちゃんもちゃんもいな

い　人」

「なに　」

「わーい、　った、　った。みんな、　げろ、　げろ」

「やーい、つぎはぎポン　、　、　」

　みんなはおいらのことをポン　って　ぶ。でも、おいらには　っていうりっぱな名前がちゃんとある。　っていう名前は　ちゃんがつけてくれたらしい。だけど、今は、　ちゃんも　ちゃんもいない。おいらを　ててくれているのはじいちゃんだ。　なのは　のことだ。服だって、つぎはぎだらけのぼろぼろだ。

「やめなさいよ、　太　たち」

いつもなら、見て見ぬふりをしている子どもたちの中の数人が太たちをめようとした。めてのことだった。

「なに」

「を にすることはせないわ」

知子がそう言った。

「そうだ。を するな」

しえる声で ロシも言った。おいらは、ちょっと らっていた。

「ほんとうのことを言って何がい」

太がすごんで見せた。

「びんぼうなのは、こうきちくんのせきにんじゃないわ」
知子は、キッと、太くたろうをにらんだ。すこしもひるむようす子はなかった。
「そうだ。そんなことでこうきちをからかうなんて、ゆるせない」
ロシもまったくひるむようす子がなかった。
そんなやり取りが続いていたとき、太くたろうの取りとまきの一ひとり人、マが口くちをはさんだ。
「レし、知っているぞ。時ときどき、ポンきちのやつ、知子のいえでごはんたべさせてもらっているんだ」
「ほんとうか、ポンきち？お前まえ、ごはんまでたべさせてもらっているのか？」
おいらは、いちばんふれられたくないことを、とつぜんつかれてうろた

えた。

「お前ん　、　に　なんだな？」

「やーい、　、　」

りの子どもたちのからかい、はやしたてる声に、カッと、　に

が上ってそれから　のことはよく覚えていない。

おいらは、ありったけの　で　太　に飛び　っていった。

すると、　太　が　向けにひっくり返って、　を　にしたたか

ぶつけた。

ごつん、と大きな音がして、　太　の　から　が　れてきた。

その　を見たおいらは　くなって、走って　げたんだ。

太　は　んでしまったのかもしれない、とおいらは思っていた。
おいらは　中で、大　に向かって走っていた。

（三）

いつの間にか、おいらは大　の　の　くへ　い込んでいた。
くて、　で、がたがた　えていた。
「太　はどうなってしまったんだろう？」
自分のやってしまった事　のことを　えていると　に　かった。
くて　が　れ出た。ひとたび、こぼれ出た　はあとから、あとか
ら　あふれてきて　めようがなかった。
おいらは、大きなイタジイの　に　きついて　いた。いつしか、声

を上げて　いていた。とても　い時間　いていた。
ずっと　いて、　の　が　れかけたとき、おいらの側でひざを
えて座っている男がいることに　めて気がついた。
「やっと　き　んだのかい？」
ゆっくりとした、　い声でその男が言った。
「だ　れ？」
いていたせいで、しゃがれた声で、おいらは　ねた。
「ああ、　ンラーっていうんだ」
「　ン　ラー？」
「　、　ってねえか？　にぎりめし　うか？」

おいらはおにぎりをもらって、かぶりついて　べた。
「うまいか？　ずいぶん、　い間　いているから、きっと、　が　る
だろうと思って　ってきたんだ」
「えっ？」（おいらのために？）
「こんな時間に、こんなところで、どうして　いている？　いったい
何があった？」
あたりはもう、薄暗くなっていた。　ンラーの聞き　には　み込む
ような　かさがあった。
「お、おいらは　」
かすれた声を　り出すように、おいらは今日の事　を懸命に話した。

ンラーは　ってじっと聞いてくれた。
そして、　ンラーは大きな手で、おいらの　をぐしゃぐしゃにして　いてくれた。
ンラーは子どものようにも、大人のようにも見えた。おいらはちゃんに　かれているような気がしていた。
そのときのおいらには　もできなかった。その　、知子や　ロシが中　になり、おいらのための話し合いをもっていたなんて。

（四）

「　のことでこんなにもたくさん、　まってくれてありがとう」
し　えてはいたが、はっきりとした声で知子が言った。　し

ているのが見ていてよくわかった。

もすっかり　れてしまっていた。　の　　には、たくさんの子どもたちと大人たちが　まっていた。知子の　、　　もいる。

知子は今日、　　が　こした事　を　　し、話し合いが　まった。

は　　のやったことを、　める　見が　く出された。

知子が　言した。

「　　のやったことは　して　せることではない。でも、　　だけが　い　でもないと　は思う」

「そうだ。なぜ、　　がそんなことをしたのか　　の立　にたって　えてみろよ」

ロシが言った。

「を　にした　太　もい」

「太　だけじゃない。　たちも　太　と同じだけ　いわ。だって、太　たちを　めようとしなかったわ」

子どもたちの話し合いは　だった。

「　の　が　なのは　の　なのか？　　のじいちゃんは一生懸命　いているぞ」

「なら、　だってしょうがない。　だからって　に　いわけじゃない」

「つぎはぎって、　を　にして　かった。これからはおいらも

つぎはぎの服しか着ないぞ」
で一番の　持ちの息子の　が　そう言ったので　みんなが笑った。
「でも、太　の　が　たいしたことなくてよかったな」
みんながうなづいた。
「今、　のやつどうしているのかな？」
「きっと　しんでいるぞ」
みんなは、事　を　こして　しんでいるだろう、　を思った。
知子の　の　は　が、大　にいるのなら大　だろうと
していた。

はきっと　が出っているのであろう、　ンラーのことを思った。そして、　の中で「　を　むぞ」と　ンラーに話し　けた。

（五）

あの事の　、みんなはおいらを　してくれたけどおいらは自分を　して　さないと　めている。　ンラーがそうしているように。

ンラーは「　して　しくなんかない」と言っていた。一人ぼっちで　らしているのに。おいらは　くて　しい人になりたいと思う。　ンラーのように。そして、また　ンラーに　いに　こうと思っている。

（下　）